

## 2日目 旭岳コース概況

大雪山は旭岳を中心とする山々の総称であり、大雪山という山は存在しない。また、国立公園名では「たいせつざん」となっているが、道民の多くからは「たいせつざん」と呼ばれて親しまれている。旭岳は大雪山系の最高峰(2,290.9m)であり、北海道の最高峰である。高緯度にあるため、気象条件は日本アルプスの3,000m級の山々とほぼ同じとされている。国内で最も早く紅葉を見ることができ、例年9月中旬には初雪を観測する。今大会を通して、大雪山を十分に楽しんでほしい。

姿見の池まではチーム行動である。各チームすみやかに出発の準備を整えよう。スタート地点は東川町旭岳青少年野営場横広場(駐車場)である。この広場は、冬季はクロスカントリースキーコースの駐車場として使われる。(図1)



図1 東川町旭岳青少年野営場横広場

スタートしたら、舗装された道を進み、広い車道を右折し、旭岳ロープウェイ方向に歩道を歩く。この区間は車道に出ないように注意する。旭岳ビジターセンターの駐車場横より木道に入る。ここからは登山道となる。(図2)



図2 旭岳ビジターセンターの駐車場入口

100mほど歩くとすぐ分岐になるので、右折して天女ヶ原を目指そう。登山道は所々木道があり、近年整備されつつある。しばらく進むと第一天女ヶ原に着く。ここは小規模な湿原で、夏にはワタスゲやナガバノモウセンゴケなどを見ることができる。さらにアカエゾマツの森を進むと再び湿原が始まる。ここは第二天女ヶ原(図3)である。湿原を過ぎると登山道は傾斜のある登りに変わっていく。



図3 第二天女ヶ原

ここから徐々に高度を上げていく。植生は針葉樹からダケカンバの林に変わり、登山道脇にはシラタマノキなどの低木が混ざってくる。さらに高度を上げるとハイマツも多くなり、森林限界へと近づく。登山道右手の沢は盤の沢と呼ばれ、小さな岩壁を伴った斜面が続く。傾斜が徐々に緩やかになると

分岐も近い。標高が上がるにつれてミヤマリンドウ、アカモノなどの高山植物も見ることができる。さらに進むとあたりは高山帯の霧囲気になり、旭岳ロープウェイ姿見駅と旭岳山頂へ向かう道との分岐に出る。分岐を右へ進み、姿見の池を目指す。道の途中にはチングルマやエゾコザクラ、キバナシャクナゲなどを見ることができるだろう。そして、右手にはオプタテシケ山から富良野岳まで連なる十勝岳連峰を、その左にはトムラウシ山も見ることができる。大雪山の美しさとそのスケールを感じる瞬間である。

小高い丘まで登ると「愛の鐘」のある姿見展望台となり、姿見の池が目の前に現れる。風のないときは池に映る旭岳の姿を見ることができるだろう。(図4)



図4 姿見の池から見た旭岳

この「愛の鐘」は1962年12月に北海道学芸大学函館分校(現北海道教育大学函館校)山岳部員10名が遭難した痛ましい事故を契機に、遭難者の慰霊と登山事故防止への願いを込めて製作されたものである。濃霧や風雪で視界が無いときには、この鐘の音で姿見の池の所在を知らせることができる。

丘の横には旭岳石室がある。旭岳石室は避難小屋であり、緊急時以外の宿泊は禁止されている。(図5)



図5 旭岳石室

ここでチーム行動は終了である。右手奥の少し開けた場所で隊ごとに隊列を整えてから隊行動に移り、旭岳山頂に向かう。あたりは瓦礫の斜面に一変し、植物がほとんどなくなる。踏み跡はほぼ明瞭だが、天気の悪いときは進む方向に気をつけよう。ここからは、斜面をひたすら登る変化の無い道が続くが、振り返れば白い噴煙と姿見の池付近の火口湖群がきれいに見える。高度を上げれば、トムラウシ山の背後に日高山脈も見えてくる。メインザックの重さで、体力的に辛い登りになるが、最後の頑張りどころだ。(図6)

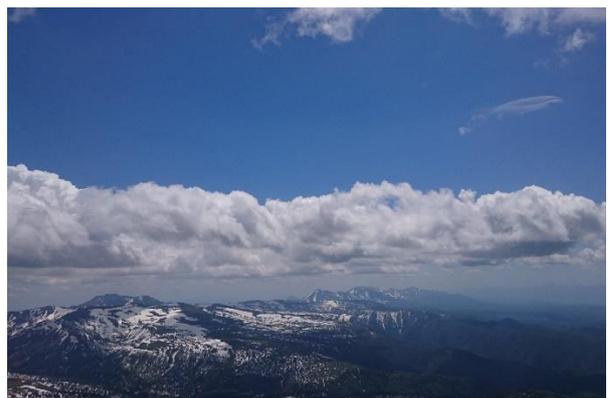


図6 トムラウシ山と十勝岳連峰

尾根上を登り続けてきたコースには、頂上の手前で岩塊が現れる。道はその岩塊をトラバースするように右傾斜に移る。ニセ金庫岩を確認しながら、急角度に左に曲がると爆裂火口の上に出る。そして、金庫岩を左手に見ながら最後の斜面を登れば旭岳(2,290.9m)の山頂である。(図7)



図7 旭岳

山頂に出ると今まで見ることのできなかった新しい眺望が広がる。黒岳や北鎮岳も見ることができる。遠くに雌阿寒岳めあかんだけや雄阿寒岳おあかんだけ、そして斜里岳しゃりだけ、羅臼岳らうすだけまで見渡すことができるだろう。

(図8. 9. 10)

ここからも隊行動で下山する。旭岳石室までは来た道を下っていく。頂上直下の急斜面はザレ場で非常に滑りやすいので注意しよう。この先は、過去に誤ってニセ金庫岩を目印に南斜面を下って遭難した「SOS 遭難事故」が起きた場所でもある。ニセ金庫岩から右に折れた後は爆裂火口の縁を忠実にたどって下る。見通しがよい時は迷うことはないが、視界不良の時は地図とコンパスで進行方向をしっかりと確認することが必要になる。

旭岳石室は登りのルートとは違うので注意する。「愛の鐘」のある姿見展望台からは、右手に旭岳を見ながら夫婦池を目指して歩いて行く。夫婦池からもいくつか分岐があるが、地図で確認しながら旭岳ロープウェイ姿見駅に向かう。姿見駅から分岐に向かい、天女ヶ原を経由して来た道を下山する。



図8 旭岳からの眺望(北東方向)  
正面は北鎮岳、右奥は黒岳



図9 旭岳からの眺望(東方向)  
正面は白雲岳、奥は道東の山々



図10 旭岳からの眺望(南東方向)  
正面奥は東大雪の山々、手前右は忠別岳

### 3日目 上ホロ・十勝岳縦走コース

北海道の山の特徴を一口で述べるならば、緯度の高さにもなう森林限界の低さと言うことになろう。北アルプスの 2,500m に対して、大雪山系は約 1,700m、知床連山は 700～900m とはるかに低い。「北海道の山は標高 + 1,000m」と言われるゆえんである。

しかし、このことは逆に言えば短い行程で高山帯に達することができるということでもある。高山植物が咲き乱れるお花畑、うっそうとした針葉樹林、燃えるような紅葉も日帰り圏内で楽しめる。色濃く豊かに残る自然とともに、北海道の山ならではの大きな魅力を味わってもらいたい。

大会3日目の舞台は十勝岳連峰である。主峰、十勝岳は遠くから見ても連峰の真ん中に三角のピラミッドのように見え、私見ではあるが、チョモランマ(エベレスト)もこんなふうに見えるのだろうか、と感じさせられる。現在、噴火レベル1の活火山であるが、有史以来何度も爆発し、大正 15 年(1926 年)の爆発に伴う泥流災害は、地元旭川出身の三浦綾子が描いた『泥流地帯』の題材となった。近年では 1988 年に小規模な噴火を起こし、その後も火山性微動や地殻変動が観測されている。

今回のコースは、A隊・B隊ともにメインザック行動、同じコースをたどる隊行動である。出発は標高 1,270m、十勝岳温泉登山口。ここには道内最高所の温泉施設がある。トイレが完備されている広い駐車場の右手のやや急な舗装道路からスタートする。ナナカマドやハンノキなどの灌木が混じるハイマツの中の広く平坦な遊歩道を進むと、正面に化物岩、その奥に八ッ手岩が見えてくる。(図1)

しばらく進むと三段山分岐(崖尾根コース)が左手にある。この崖尾根コースは落石事故のため、10 年ほど閉鎖されていたが、2020 年に復活している。分岐を過ぎてしばらくすると左手に自動観測の機械が見え、その奥に夫婦岩が見える。ハイマ



図1 左奥に八ッ手岩、右手に化物岩



図2 ヌッカクシ富良野川渡渉地点

ツが尽きた先で右手の涸れた沢、ヌッカクシ富良野川に下り、これを渡る。(図2)

対岸の斜面に取り付き、いったん下流方向へ折り返すように斜めに登り尾根を南側に回り込んで稜線に向かう。この尾根はD尾根と呼ばれている。斜面に取り付く際は意外と正規の登山道を踏み外すことがあるので注意しよう。尾根に出ると視界がひらけ、富良野岳から三峰山の稜線が一望できる。岩がごろごろした沢地地形を渡ると富良野岳との分岐、上ホロ分岐である。(図3)

分岐を左上に歩いてしばらく笹地を歩き、浅い沢地地形を歩くと木段が迫ってくる。通称「三百階段」の急登だ。本日最初の試練となる。三百階段かどうか数えて登ると、もしかして気が紛れるかもしれない。登り詰めるとD尾根の上部である。砂



図3 上ホロ分岐

礫と背の低いハイマツの尾根で、イワブクロ、エゾイソツツジ、エゾノツガザクラなどの花を楽しむことができるだろう。眼下に爆裂火口である安政火口、西に富良野岳の勇姿を見ながらの登山となる。左手のハツ手岩を過ぎ、右に曲がって最後の急登を登ると主稜線に出る。ここは強風が吹き荒れることが多く、先へ進むことができるかどうか、適切な天候判断をしなければならない場所だ。ここから右へは三峰山、富良野岳へのルートとなるが、左へ行くと、ほんの30秒ほどで上富良野岳へ到着する。(図4)



図4 上富良野岳からD尾根を見下ろす

ここからいったん分岐へ戻ってからイワヒゲ、ミネズオウ、メアカンキンバイなどの背の低いお花畑の斜面を下り、コルから50mほど登り返すと上ホロカメットク山(1,920m)山頂である。(図5)



図5 上ホロカメットク山頂上から十勝岳を見る

メアカンキンバイ、ミヤマキンバイはよく見ると違いがわかる。時間があれば、ぜひじっくり観察してもらえると花々も喜んでくれるはずだ。

上ホロカメットク山(通称上ホロ)は夏冬通して登られており、頂上直下には中央壁と呼ばれる絶壁が続く、ハツ手岩や化物岩とともに冬期登攀のコースになっている。上ホロカメットク山の語源については諸説ある。『上富良野町百年史』所載のアイヌ語表記では、ペナクシ・ホル・カ・メツ・ヌブリ「十勝川・空知川本流の川上にある・後戻り川の・峰(十勝岳連峰)の端(深山)の・山」と説明されている。ちなみに十勝岳の山名は、トカプチ(十勝川)の水源であることに由来する。

ここからいったんコルに戻り、上ホロカメットク山を迂回するルート歩いて上ホロカメットク山避難小屋に到着する。ルート上に多くの雪渓が残るが、しっかりキックステップし、安全に滑落することのないよう注意して歩いてほしい。この雪渓がまさしく十勝川の源頭である。避難小屋は2階建てで、水場は今通ったルート上の雪解け水を利用する。夏はもちろん、特に冬の悪天候の際には重要な小屋である。また、トイレも常設されている。老朽化が進んでいたため、昨年建て直された。

避難小屋から1分ほど歩いて主稜線に入り、十勝岳を目指す。西側が切れ落ち、東側には緩い稜線が続く。東山麓の森は原生林で、その緑の濃さを目に焼き付けてほしい。ハイマツが所々稜線に

迫ってくるほか、メアカンキンバイが咲くぐらいで、植物は少ない。崖側は崩れやすいので、視界がないときは、安易に近づかないように。(図6)



図6 十勝岳から見た上ホロと旧避難小屋

白茶けた火山灰地が露出し火山らしい稜線になってくると標高 1,870mの大砲岩分岐。大砲っぽい岩と考えて歩くと何となくそんな感じがするが、どうであろうか。ここから三段山への道が分かれるが、途中で崩壊し、現在は通行止めとなっており、杭とロープで仕切られている。分岐から十勝岳までは約1時間。背後には歩いてきた稜線が波うって続き、富良野岳の緑色の山肌が際立つ。通称馬の背と呼ばれるコブ(1,921m)を越えると登山道は火山礫で歩きにくくなる。ジグザグの登山道はメインザック行動では最もきつい登りとなろう。(図7)



図7 十勝岳から  
上ホロ～富良野岳(正面)と芦別岳(奥)

たどり着いた十勝岳(2,077m)(図8)にはイワツバメが飛び交い、山頂から先にも美瑛岳への褐色の稜線が続いている。さらにその先にはトムラウシ山が望まれる。富良野盆地も一望でき、丘陵の奥にある芦別岳の鋭い稜線が目を引き。また、南方には日高山脈も遠望できる。



図8 十勝岳山頂

十勝岳から望岳台への下りは、肩から急斜面となり足場が悪いので注意しよう。踏み跡がいくつもあり、浮き石も多いので、落石に注意して歩いてほしい。急斜面を下るとグラウンド火口とスリバチ火口間の砂礫の稜線を進む。(図9)



図9 グラウンド火口とスリバチ火口間の砂礫地

風向きによっては現在も活動している62-II火口や大正火口などからの火山ガスや噴煙が届くので注意が必要だ。1926年の泥流はグラウンド火口で起きた水蒸気爆発が原因であった。いったん緩んだ登山道も1,730mからまた急な下りとなる。ザ

レ場の下りなのでスリップや転倒に注意しよう。

尾根を離れ、涸れ沢を渡り、右に曲がると標高1,330.2mの十勝岳避難小屋である。中にはヘルメットや毛布などの防災品が備えられており、活火山であることを再認識させられる。(図10、図11)



図10 十勝岳避難小屋

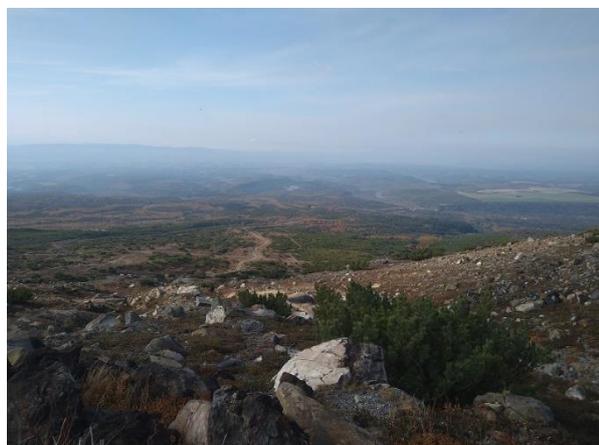


図11 十勝岳避難小屋から望岳台を見下ろす



図12 雲ノ平分岐

小屋から少し下ると雲ノ平分岐となり、右に行くとポンピ沢を経て、美瑛岳に至るルートとなる。(図12)

さらに泥流の跡を下ると泥流分岐である。かつての泥流で流された植生は、今ではマルバシモツケやエゾイソツツジ、シラタマノキなどが見られるほどにまで回復している。さらに下ると望岳台に到着する。2016年に建て替えられた24時間開放の頑丈な防災シェルターは下山する際のよい目印ともなる。今回は左に進み、白銀荘分岐から九条武子歌碑を経て、吹上温泉白銀荘登山口へと下山する。